
科学魔術学部にようこそ！

翠珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

科学魔術学部にようこそ！

【Nコード】

N9495E

【作者名】

翠珀

【あらすじ】

科学魔術学部の変人たちの奇行を覗いてみよう！！主人公はもちろんツツコミ。コメディだったりシリアスだったり。遊んだり騒いだりのドンチャン騒ぎ！！何でもアリのごちゃ混ぜ！文法がおかしかったりする拙い小説だけど読んでみる！！……あー、ちなみに作者翠珀はかなりの気まぐれだ。つまり気まぐれ更新。だからこの作者にあまり期待かけなえ方がいいぜ？（by主人公）

第1話 スカイアウン学園（前書き）

翠珀です。2度目の小説となります。読んでみてください。

第1話 スカイアウン学園

「アース」は科学と魔術が入り混じっている世界。

俺はスカイアウン学園という学園の入学式に出ている。どんな学校でも共通する長い校長の話の間に俺の紹介をしておこう。

俺、神代裕真^{かみしろゆうま}は4月4日生まれの16歳。黒髪黒目で後ろ髪は男にしては少し長いぐらい。身長はほんの少し物足りない168cm。

他は平凡な学力、平凡な顔立ちだ。まあ、平凡じゃないところがあと1つだけあるんだが、説明すんの面倒だから後でいいだろう。

まあこんな感じか？自己紹介は。ちょうど校長の話も終わったしこれでいっか。

そして、入学式は終わって、校長やら教頭やらが出てゆき残ったのは俺たち入学生と5人ぐらいの大人たち。

「では、この人からこの人までは1-Aです！自分についてきてください！！」

スーツを見事に着こなしている20代前半ぐらいの俗世ではかつこいいという部類にしろうじで入るっぽい男が呼びかけている。

まあ、俺は世の中に興味はないんでな。つーか、何てアバウトなクラス分け！名前順に並んでるんだろここは！！

「ではこの、神代裕真さんから、えーっと、九条凛音^{くじょうりんとね}さんまでが1-Bです。わ、私についてきてください！！」

白衣を着ていて何故か、上にかなり年季が入ってる小学生が描くような魔女が頭にのせてるヤツ。三角帽を被り、長い髪を三つあみにして黒いフレームの丸眼鏡をかけている可愛い部類に十分入りそうなさっきの男と同じ20代前半の女が呼びかけた。

ちなみに何故「か」から「く」までかと言うと、それだけでもう既に30人ぐらいいるからだ。と思う。

俺は1-Bなのか。この女が担任なら……不安だ。

「えーっと。皆さんは何故こんな大雑把なクラス分けなのかと思ってる人もいます」

当たり前だろ。

「それには理由があるんです」

そう言っただけ配られたのは一枚のアンケート用紙。そこには魔術学部・科学学部・科学魔術学部と書かれていた。

「このスカイアウン学園には3つの学部があります。魔術を学ぶ魔術学部。科学を学ぶ科学学部。そして、科学と魔術両方とも学ぶ科学魔術学部の3つです。皆さんはその3つから自由に選んでください。この教室にはあまり集まらず、勉強はそれぞれの校舎でやるんです。だからクラス分けは大雑把でいいんです。学部って？と思う人もいますから、説明しますね！」

そう言っただけ女は紙をまた配った。そこには、説明が書かれていた。

魔術部は魔術だけを勉強する。その代り他は学べない。

科学部は科学だけを勉強する。その代り他は学べない。

科学魔術学部は上のどちらにも勉強する。その代り授業の量が多く、寮生活となる。

簡単に言っただけこんな感じだ。

「では、アンケート用紙のどれか丸をつけて提出してください。1度その学部と決めたら、もう変えることはできないので慎重にやってくださいね！」

皆ほとんど提出してゆく。残ったのは俺含めてあと数人。

魔術学部もいいけど科学学部もなー。俺は寮生活になるからーとか悩んではいるが俺はもうとっくに決めていた。

俺はアンケート用紙に丸をつけ提出した。

「では、これで終わりですね」

俺が最後だったらしい。

「地図を配りますので行ってみてください。あと、アンケートの結果は30人中魔術学部14人。科学学部13人。科学魔術学部3人です」

地図を見ると魔術学部と科学学部は中心の方にあるが科学魔術学部は一番教室から離れていた。
まっ、いつか。

俺は科学魔術学部がある校舎に向かった。

第1話 スカイアウン学園（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

友達と考えたヤツです。と言っより、学園とか大まかな設定しか考えてなかったんだけどね……。

第2話 戦争かよっ！

「この学園広すぎだろー！！」

俺、神代裕真は現在迷^{いま}ってますー！理由は広いから！

「あー。くそ、どうする？何で科学魔術学部だけ遠いんだよ。おい、何やってんだよ校長。殴るぞ？蹴るぞ？刺すぞ？」

思考が危ない方向へ行き始めた時に誰かが声をかけてきた。

「あー」

振り向くとそこにいたのは……誰だろう。女子ということしか分からない。

「私多分キミと同じ科学魔術学部なんだけどー」

「おう。俺も科学魔術学部だよ」

その女子は俺と同じ黒髪黒目で、身長は160か？腰まであるその黒髪をツインテールにしている。

ちなみになぜ俺がツインテールだと分かったのかと言うと、姉さんと妹がその髪型にしたことがあったからだ。その時妹に「ツインテールって言うんだよ」と教えてもらったのであり、断じて幼女趣味^{ロリコン}とかではない！ホントだぞ！

……って、何で幼女趣味^{ロリコン}って言ってるんだー！ほぼ断言してるに近いぞ俺ー！！

「で、お前も迷ったのか？」

「うんそつだよー」

全然迷ってなさそうだ。

「地図なくしちゃったんだ……」

「マジで？俺の見せようか？」

「ありがとー」

なんて言うか、天然？礼儀正しそうなタイプだな。

「でも、地図あるのに迷うってキミ面白いねー」

前言撤回。こいつはただのバカだ。

「私は1 - Bの九条凜音。よろしくね」

「俺は1 - Bの神代裕真。よろしく。って同じクラスか」

名前だけの自己紹介を済ませた後、俺らは長い廊下を歩いていた。

「うゝん」

「どうした？うなってる」

すごい悩み事だったらどうしよう…。

「いや、キミをどうやって呼ぼうかなー。って」

「それぐらいで悩んでどうするんだー!!」

真剣に悩んだ俺がバカだった！

「神代君？神代？裕真君？裕真？ゆう？ゆうゆう？かーくん？ゆうくん？あつ!」

「なんだ？」

何か変な呼び方にされそうだ……。つーかゆつくんって姉さんと妹が「2人の専売特許」って言ってたじゃねーかよ!!

「ゆーくん!」

「おいーーーー!!」

「おうわっ」

「何がおうわっ。だよ!何だよそれえ!」

俺は勇者だ!こんな変な名前つけてくるモンスターになんか負けんぞ!!

勇者：カミシロユウマのターン。

「あのなあ、俺は16だぞ!高1だぞ!てめえの頭はどうなってるだ!!このバカ野郎!」

攻撃：精神的攻撃!!（悪口）

モンスターに10のダメージ!

モンスター：クジヨウリンネのターン。

「じゃあ、ゆうゆうとか、ゆうの方がよかった？ごめんねっ。気づいてあげられなくて」

魔法：天然の言葉！！

「ぐはっ！」

勇者に1000のダメージ！！勇者は敗れた。 G A M E O V E R

「じゃ、ゆうくんがいいよ。マシそうだし。と言っより裕真っっていう選択肢は？」

「裕真は何となくダメなんだー」

「はぁ……」

と言いあいのようなことをしているとまた誰かが声をかけてきた。

「おーい。お前らも科学魔術学部？」

「おう」

「うん」

「俺は1-Bの如月^{きさらぎ}絢。よろしくな」

そいつは俺らと同じ黒髪黒目で後ろ髪が俺と同じぐらいの長さで、イタズラそうにその黒目は輝いていた。身長は俺よりも少し上か？もしかして俺の168cmという身長は平均なのか？

「うーん。じゃあ、あーくん！」

「はぁ！」

如月絢は固まった。

やっぱ、驚くよな。うん。

「うん。ゆうちゃんとあーくん。あっ、私九条凜音」

「俺は神代裕真」

「じゃあ、凜音と裕真だな」

「俺も凜音と絢で」

「えー」

「うるさい!!」
おっ、ハモった。

その後は、あんま記憶に残らないような話をして、ようやく科学魔術学部の校舎についた。

俺が扉を開ける。

ギィ。そんな音をたてて扉が開いた。

そこには、大きな広場。

「はあっ!?!」

俺と絢はそろって声をあげた。

「楽しそうだねー」

凜音は間延びした声をあげた。

そこでは、戦争をしていた。

「くそっ、負けるなー!大砲用意!!」

と、眼鏡をかけた男が言っている。ブレザーのネクタイが緑なので3年だろう。

「相手は大砲をぶっ放す気だー!!シールド用意!!」

と茶色の髪を腰まで伸ばした女が言ってる。ブレザーのネクタイが赤だから2年だろう。ちなみに俺たち1年のネクタイの色は青だ。

「大砲!発射!!」

「シールド展開!!」

ドカーン!ドカーン!

そんな音をして、大砲の弾が周囲を飛び回る。壁に当たってもまた戻ってくるので広場は大惨事となった。

「おいおい、これは何だよ」

「知るかつ!」

絢が聞いてきたのでとっさに言い返す。

「あっ、こっちに気づいたみたいだよー」

3年が言う。

「こちらに味方してくれー！！キミらが来れば僕たちの勝利は明確なものとなる！」

2年が言う。

「こちらに味方しろ！！こちらは危険な状況なのだ！君らが来ることにより逆転できるかもしれない！！」

どっちに味方すりゃいいんだ！？

「私は、ゆーくんが決めた方でいーよー？」

「俺も裕真が決めた方でいいぜ？」

うーん、どっちもめんどくさいだけなんじゃねえの？

と俺は思ったが、結局考える。

「じゃあ、不利な方に」

「じゃあ2年生だねー」

「行くかあー」

2人の了解も得たところで俺は2人に叫ぶ。

「おうつ、俺たちは、2年に味方しますよー！！！！！！」

そして俺たちは2年の方に小走りせいやかなでで向かう。

「よく来てくれた。私は星夜奏だ。早速だが、あの弾丸の処理を頼みたい」

「はい。てか何故戦争？」

俺が聞くと奏さんは

「理由は無い。ただ遊びたかつただけだ」
と言いきった。

「はあ？」

「いいから行け！！」

科学魔術学部は何かヤバイ！！！！！！

俺はそう言おうとしたけど、凜音と絢がすごいやる気を出しちゃったから何にも言えなかった。

頑張るしかないのか……。

第2話 戦争かよっ！（後書き）

読んでくれてありがとうございますー！！

第3話 プチッ。は堪忍袋の緒が切れた音だ。

この世にはアビリティと言われる特殊能力をもつ人間が10万人に1人ぐらいの割合でいる。アビリティと言っても、弱い力がほとんどもを占めている。そしてアビリティを持つ人間のほんの一握りの人間が強力な力を持っている。短いけどこつこつけ説明終了!!
まあ、この説明の流れから読者の皆さんのお察し通り、俺の平凡じゃないところがアビリティで、しかも強力な力だったりして。

ちなみに2人は、

「ゆーくん、頑張ってー」

と言いながら魔術で弾丸を凍らせてる凜音。

「裕真もやれよ」

とこつちを睨みつけながら大剣で弾丸をぶった切る絢。

2人とも強すぎだろ!!! つか何さりげなく魔術使ってたよ! ちなみに弾丸はあと5個飛びまわっている。

仕方ねえ。やるか。

「アビリティ発動!!」

弾丸がいきなりパツと消える。皆戸惑っているようだ。まあ、別の空間に一瞬で消えただけなんだけど。

「わー。消えたよー。何でだろ? あっ、もしかしてゆーくんが目にもとまらぬ速さで切り刻んだとか……」

「なわけねえだろ!!」

俺は凜音の頭を軽めに叩く。

「ゆーくんはツツコミだね!」

「つつ……」

ツツコミと言われると、いつもは反論する俺が何も言えなかった。だってさ、上目づかいでにっこり笑われるとさ、何にも言えねえじゃん。

多分顔が赤くなってる俺。

「どうしたの？ ゆーくん赤くなってるよ」

いや、ゆーくんとかありえないだろ。そっち系の趣味の人だったら
KOだね！

俺が混乱状態に陥ったその時、

「お前ら何ラブコメみたいなことやってんの」

と呆れた様子で絢が戻って来た。

「ラブコメ…？ それなんだ？」

「うんうん、らぶこめって何？」

混乱状態を抜け出せた俺と凜音がラブコメとは何かを聞くと絢は黙
って目をそらした。

「おいっ！」

「おおおおおおおおお！！！！」

俺が追及しようとしたその時、奏さんが走り出した。

そのまま軍隊っぽくなってる3年の合間を縫ってそのまま指揮して
る3年の元へ行き、手を首筋にあて、ニヤリと笑った。

「降参するか？ 二宮先輩」

眼鏡の男：二宮さんは苦笑いして静かに手を上げ、

「分かった。降参だ」

と言った。

2年から歓声が上がる。

奏さんは

「勝利は私たちの物となった！ いや、ここで勝つことはもはや運命
だったのだ！」

と叫び、完成はますます大きくなった。

正直言って美しい。なんつーか、戦女神ヴァルキュリアって感じ。勝利の女神って
やつ？

だが、俺のその感動は奏さんと二宮さんの会話で脆くも崩れさる。

「これで私たちが1週間遊びを決めることができるな」

「約束だからな。この戦争ごっこは楽しかったな」

「ああ、またやるか」

「そうしよう」

あ。つまり、これは遊びだったと。そういえば奏さんも「理由はない。ただ遊びたかっただけだ」とか言ってたし。

プチッ。堪忍袋の緒が切れた音がした。

「うが
!!!!!!」

「びっくり」

「何だ裕真！」

と驚いてる凜音と絢は無視して、俺はつかつかと奏さんと二宮さんの元へ歩いてゆく。

すーはーすーはー。

「2人ともそこへ直りやがれ!!」

「はいっ!!」

大声にびっくりしたのだろう。大人しく床に正座した2人を相手に俺は説教を始める。

「てめえら、この戦争ごっこのことどう思ってる？」

まずは静かに優しく聞く。奏さん考えこんだ風に言う。

「えーっと、楽しい。かな？」

プチッ。

「楽しい？はいそうですね。俺は今とてつもなく怒ってますがね」

「だって、楽しいのものは楽しいからしょうがないじゃん」

二宮さんが唸るように言う。

プチッ。

「あんたらは小学生か!!!」

ハイ。ここからは俺の独壇場です。

「てめえらは、わざわざ来た1年生の前で戦争をし、しかも助けを求めてきた拳句、最後はごっこですか……。しかも、遊びをどっちが決まるかのために! あーあ、助けるんじゃないよ。てめえらなんてゴミのように死ねばよかったのに。それにさー」

その後、俺の説教は1時間位続きましたとさ。

他の人たちはおびえて何も言わなかったし、凜音と絢も固まっていた。

余談だが、神代裕真は後に、この件を知った魔術学部や科学学部の教師たちと生徒たちに「科学魔術学部のストッパー」と呼ばれるようになった。

第3話 プチッ。は堪忍袋の緒が切れた音だ。(後書き)

あらずじ変更しました！。

絢のキャラがつかめない……。凜音は天然。裕真はツツコミ(一応)

絢は…？

第4話 初登校！…になるはずが理事長に…対面（前書き）

サブタイトルなげえ！！！！！！

第4話 初登校！…になるはずが理事長にご対面

ジリリリリ ！！。そのやかましい音を鳴らす目覚ましを俺は壁へ投げ付けた。壊れたな。と思わせるガチャン！という音が俺の意識をきちんと覚醒させた。

「……………あー」

俺がスカイアウン学園に入学してから1週間。ついに初登校の日だ。1週間の間に教科書を買ひ揃えたり、寮の人たちと自己紹介したりした。でも、教科書はあのハチャメチャな科学魔術学部に必要なのか怪しいものだ。

俺はむくりと起き上がり目覚ましを無視して着替え始める。すると、後ろから誰かが動くような音がした。

「おはよう裕真」

後ろを振り向くと予想通りの黒髪黒目の俺と同じぐらいの身長で中性的な顔。

「おはよう鴉」

こいつは深淵鴉^{しんえんからす}。俺のルームメイトで、1 - Aの科学魔術学部所属だ。

鴉は制服を着終わった俺を見ると驚いたように俺を見て、

「あれ、写真のカノジヨ2人にあいさつのキスしないの？確か夕衣^{ゆい}ちゃんと由羅^{ゆら}さんだっけ」

と言った。もう笑い声が混ざってるぞ。驚いた顔も笑い顔になってるぞ。

「そんなことやるかあ！！それに彼女じゃなくて妹だ！姉さんだ！つたく…」

俺は鴉に背を向けて俺と妹……夕衣と姉さんと俺。3人で写ってる写真を見つめると

「おはよう。夕衣。姉さん」

と朝の挨拶をした。

一応ここで寮の説明をしておこう。スカイアウン学園は男子寮「刹那」と女子寮「蝸」が科学魔術学部とは反対の端の方に向かい合うようにして建っている。外から見ると外国っぽいレンガ調の古めかしい屋敷だが、中はセキュリティ万全の高性能なマンションだ。ちなみにクジ引きで部屋割りが決められるのはご愛嬌で、誰になるかわからないのがまた怖い。学部も年齢も関係ないからヤバイ奴に当たったらご愁傷様ってことだな。ルームメイトになりたくない人ランキングでは不良とか科学魔術学部とか変人とかが上位を占めてるらしい。もちろんの如く1番は科学魔術学部らしいと鴉から聞いた。

それにしても作者はアニメ・マンガが好きなのか……？ ガダム最新作の主人公のコードネームと連続猟奇殺人で有名なひらしだぞ？

「裕真、何選ぶ？ 俺は謎定食。香織さん！ 俺謎定食をお願いします」
「あつ、おう。俺はB定食でよろしくお願いします」

「分かったわ。裕真君と鴉君はいつも礼儀正しいわねえ。ホントに科学魔術学部かしら」

「ありがとうございます」

この腰までの茶髪を1括りにしていて白い肌に映える紅い目が特徴的な女の人は井上香織さん。スカイアウン学園と言うより科学魔術学部の卒業生で「科学魔術研究室」っていうスカイアウン大学の研究室で働いてるらしい。でも、いつも食堂にいるから嘘かも知れない……。ついスカイアウン学園に大学があるなんて初めて知った。
「はいっ！ 謎定食とA定食！」

俺は食パン、バター、サラダに麦茶。鴉は丼。何か茶色っぽい液体がかかっている。ちなみに謎定食とは香織さんが考案した不気味な食べ物だ。日替わりで出てくる生徒たちに恐れられてるメニューである。食べている生徒は鴉だけだ。絶対に。

「いただきますーす」

「いただきます」

俺と鴉はもくもくと食べる。そして俺が食べ終わって麦茶をのんびり飲んでいると鴉がやつと口を開いた。

「もぐもぐ……こりゃ、キャラメルだね」

「食べながら喋るな。てかキャラメルかよ。マズイか？」

「どんな味なんだ？多分…マズイだろうな。常人にとっては。」

「結構ウマイよ」

「てめえの舌はどうなってるんだよ！」

「やっぱ、こいつ常人じゃねえ！」

俺はテーブルを叩く。グーで。

手がジンジンする。痛え。

「もぐ…ごくん。香織さん、これ何？」

香織さんは鴉の言葉に少し考えて言った。

「とかしたキャラメルにありったけの調味料を入れたのよ。だから

「キャラメル+その他井」かなー」

「そりゃウマイ訳だ」

この2人は舌がおかしいらしい。

俺が食器を片付けようとしたその時、ピンポンパンポン と放送がながれてきた。

『神代裕真君、深淵鴉君、如月絢君は至急理事長室へ来てください』
何だろう？若い女の声だったけど……。

『ちなみに10分以内に来ないと殺してバラす』

コワ ！！

「また、理事長ねえ」

香織さんは困ったかのように苦笑いする。

「あの人、人間嫌いのくせに面白そうな人がいると呼び出すのよ」

「すっごいワガママな人だなあ」

鴉がのんびり言っと、香織さんは苦笑いしたまま死刑宣告をする。

「はやく言った方がいいわよ？10分以内に行かなかったから学園

に通えなくなつて、そして今は外国で療養中つていう噂がたった人が私のクラスにいたもの」

「只今行きます！行くぞ鴉！」

「そこをあの世へ逝くの逝くにすればウケること間違いないし」

「何ありそうなこと言つてんだよ！！」

俺は鴉を引つ張つて走る走る。一応校内案内図で理事長室の場所は分かつてるから問題なし。

「あと5分！！」

そして、やつと着きました理事長室！スカイアウン学園の中心に位置する塔の最上階の45階……ではなく最下層である地下5階に理事長室はある。

で、意外にどこにでもありそうな質素な、けど真つ黒な扉の前に俺と鴉は立っている。

「ぜえ、はあ。ぜえ、はあ。神代裕真、深淵鴉。失礼します。はあ

……はあ……」

くそつ、何でエレベーターがないんだよ！みんな魔術か？魔術を使つているのか？

「おう。入れ」

若い女の声が聞こえた。ので、入る。キィ　という音を立て扉が開く。

「ゆーくん！お久々」

「よお！」

凜音と絢がソファに座っていた。奥に立派な机があつてそこにある革張りのイスにその人は座っていた。

ん？誰がだつて？俺にはこれしか言えないな。すっごい俺様っぽい人。

せめてとして特徴を上げると赤い髪。緑の眼。黒のスーツ。20代前半の長身の女。

その女は皮肉めいた笑みを浮かべ、こう言った。

「よお！俺はスカイアウン学園の理事長。かみじょせいさい 神条征碎だ」

何じゃその名前。

「ちなみに通り名は「ジャステイスクラツシャー 義を打ち砕く義」だ」
通り名まであるのかよ！っ！かスゴッ！！

第4話 初登校！…になるはずが理事長に…対面（後書き）

半分放置していたにもかかわらずお読みくださりありがとうございます！

第5話 はああああ！？（前書き）

前話までのあらすじ！

科学魔術学部に入った主人公神代裕真と同じ学部の九条凜音、如月
絢、深淵鴉。

科学魔術学部に初登校。のつもりが理事長『義を打ち砕く義』神条
征碎に呼び出しを受け！？

第5話 はああああ！？

俺達は革張りのソファに座って無言。あえて無言にした。と言うよりこんな俺様な人がいたら無言にしか出来ねえよ。

沈黙が数分…ではなく数秒続く。

破ったのはやっぱし予想していた通り俺様な理事長だった。

「ア　　！！何でデメラ黙ってたんだよ！ここは普通「何で俺達を呼んだんですか？征碎様」だろおおがああ！！」

「何で様ついてんだよ！普通は理事長だからな！分かってんだろ自分でも！」

あつ、いけね。つい……。

理事長は本当にビックリしたように言った。

「マジでか？知らなかったぜ。いやー悪い悪い」

「ぜってえ悪いと思ってねえよな？そうだよな。うんそうだよな」

というよりその年で様づけが基本だと信じてるなんて…ありえない。

「さすがココの理事長。やることが半端ないですね」

「ありがとうございます」

鴉！お前なんで褒めてんだよ！

「とにかく理事長、何で呼んだんですか？」

さすが絢！ナイス！

「あゝ？俺が呼びたかったから呼んだんだ。文句あるか？」

なんて言うか、俺様の真骨頂キタ　　！！

「……そうですか」

おいアツサリと引き下がるな！

「せーちゃんは何が面白いのかなっ？」

そしてお前は理事長にまであだ名かよ！！

「りーちゃん！よく聞いてくれた！」

便乗してんじゃねえええ！！

二人はそんな俺に構わず話を続ける。

「つっても「漫才トリオ」とか「唯一のツッコミ」とかいう会話だったかな！」

「とまあ、冗談はさておき」

「冗談なのかよ！30分も話してたくせに！」

「おお。正確だな。さすが人間時計」

「それはいつ誰がつけたんだ！」

「今、俺が」

「普通に言われるとかなりムカつくー！」

「こいつらは何だ。俺をキレさせる才能でも持ってるのか。」

「で、そろそろコメディは止めにしようや」

「理事長はいきなり真顔になった。」

「さっきまで笑っていた緑の眼が鋭く眼光を放つ。」

「いきなり、威圧感を放つ理事長。」

「マジでさっきまで俺様の真骨頂だった理事長？」

「お前らを呼んだのは、お前らが特殊な存在だからだ」

「はああああ！？」

第5話 はああああ!?(後書き)

更新がかなり遅くなりました……。
すいませんでした!!

第6話 俺様傲慢我儘自己中理事長様（前書き）

何か無駄に頑張って長くなってしまった……。

サブタイトルは裕真の中での神条征碇様の評価です。

ちなみに様づけなのはそうしないと何かダメな気がしたからです。

第6話 俺様傲慢我儘自己中理事長様

えーっと、何でいきなりシリアスなふいん気？

おかしいだろ！絶対これなんかの間違いだつて！

「まずりーちゃん！」

あだ名やめろお！何か俺の中でシリアスな感じが崩れるだろうが！

「何かなせーちゃん」

…お前のあだ名つける癖はもうつつこまねえ…。

「お前は異常なほどに魔力が高いっ！化け物クラスだ！正直言つとアースで一番魔力がある」

「へ？そうなの？」

確認するように周りを見渡す凜音。

確かに戦争ごっこで魔術使いまくってたもんな…。

ちなみに魔力が豊富にあればアースを乗っ取ることも可能らしい。

それとアースでの優劣基準は「魔力」と「剣技」だ。

「そして絢！」

「…何ですか？」

「お前は世界に一つだけの大剣^{クレイモア}「カリバーン」を操ることができる
！」

絢は驚いたように目を見開いた。

「俺の大剣がカリバーン…？アレは折れたはずじゃないんですか？」

ちなみに分からないと思う読者の皆様に説明しておく。

カリバーンはアーサー王伝説の中に登場する聖剣で、アーサー王が岩から抜き、ブリテンの王で在ることの証を立てたあの結構有名な剣だ。その後アーサーが後ろから斬りかかると言う騎士道に反した行為をしたために折れてしまったといわれていて、折れた聖剣として不幸の象徴になっていることもあるんだ。ちなみに後にアーサーが湖で手に入れる剣「エクスカリバー」の名は「Caliburn」から変化した「ExCaliburn」という説があるらしい。…

…Wikipedia…。

まあ、長つたらしい説明だがとにかくカリバーンは不吉の象徴である聖剣だ。

「アーサー王伝説とは少し？違うけどカリバーンは折れた後、再び剣として戦えるように再生した。それでアーサー王は二度と自分が使えないように遠く離れた極東の島国、日本有数の殺人剣の一族如月家の当主でありアーサー王の旧友、如月氷璃ひょうりにカリバーンを託したらしいよ。……ああ、絢君は如月一族の直系だったね」

鴉が説明する。……何故お前はそんな事情も知ってるんだ！！

「そんな…爺様に渡された剣が……」

「そして鴉！」

「かーくんは？」

凜音はもうあだ名をつけたらしい。

思えば凜音がつけるあだ名って全部名前の最初の一字に「ーくん」か「ーちゃん」じゃね？

「お前は烏天狗と人間のハーフだ！」

「ええ！？そうなのかーくん」

「そうなのか…？」

「俺の剣が…カリバーン」

「絢はいい加減こつちの世界に戻ってこい」

絢はどこかにトリップしちまった。

まあ絢は現実逃避上手そうだもんな…。

「はい、そうですね。闇を司り、飛ぶ生き物全ての頂点に君臨する

飛翔族最強の化け物…烏天狗。僕は烏天狗、深淵黒鴉くろあと魔術師、深

淵翔ちやんの一人息子です」

飛翔族って言うのは飛ぶ生き物…ドラゴンとかも含める…のことを言う。

あれ？待てよ…？深淵黒鴉？

「深淵黒鴉って烏天狗族の長じゃねえか…！」

「あ、よく知ってるね」

「知ってるわ!!」

鴉! お前はどこまで俺のことを下に見たら気が済むんだ!!

「いやだなあ、下に見てないよ。ただ父さんが烏天狗の長ってことは知ってる人が限られてるんだ」

「勝手に人の心を読むなあ!!」

「読んでないって」

「読んでるわあ!!」

「裕真が簡単に顔に出してるだけだって」

「出してねえっ!!」

「てめえら…静かにしやがれ!!!!」

理事長の一喝で静かになる理事長室。

絢はブツブツと呟いてるがな。

「最後に裕真!」

「ゆーちゃんは何かなー」

凜音はワクワクという表現がまさに当てはまるほどキラキラとした目で理事長を見る。

……何期待してるんだよ!

「お前が一番特殊だ」

そうなのか!?

「お前は強力なアビリティを数種類持っている。そしてその力は日々成長している。……違うか?」

くそっ、バレちゃった。

姉さんと夕衣が散々「絶対アビリティのことは言っちゃだめだよ!」って言ってたのに……。

約束破っちゃったじゃねえかあああ!!

「今の時点で約束破った方を考えるお前がすげえよ……」

「理事長に言われても嬉しくねえ……! って何で分かった! ?」

「そりゃ俺様は最強だからな。読心術ぐらい身につけてるさ」

「ああ、そうっすか……」

俺は肩をすくめて言った。

「はいそうですよ。俺はアビリティを数種類持ってます」

「おら。さつさと種類と強さ聞かせろ」

理事長がかなり偉そう……！

「ったく、何でそんな偉そうなんだよ……おつといけね。まずは――

……

クリエーションワールド
空間製作能力。

その名の通り空間を製作する能力で、科学魔術学部「戦争ごっこ」で大砲の弾は消えたのは俺が空間を製作してその中に入れちゃったからですね。

それと――

「もういい！やめろ！」

俺様傲慢我儘自己中の理事長が止めやがりました。

止めるんだったら最初から言わせるなああ！！

「だって聞きたかったし」

「私も聞きたかったよ？」

「僕も僕も」

「……爺様は……この事実を知らなかったのか……？」

「なら最後まで言わせるおお！！あと絢はトリップ時間が長すぎだ

あああ！！それと勝手に人の心を読むな！プライバシー侵害！」

すると3人はこう言いました。

「今は聞きたくねえんだ。それに俺様の前では法律も憲法も何もか

もゴミだ、クズだ」

「心読むのは癖なんだ。ごめんねっ！テヘッ」

「ごめんねゆーくん」

「凜音は謝ったからいいとして……理事長！あんたはきちんと規則を守れ！鴉は何テヘッつけてんだ！それに……^{おんぶ}ってわざわざ言っなああ
！！」

もうムリ……。

理事長は「かなり」偉そうに言った。

「もう話は終わりだ。お前ら、俺の仕事やら娯楽やらの邪魔だ。おら、さっさと科学魔術学部で勉学に励みやがれ。こんなところで油売ってんな」

「なら呼ぶなああああああ！！！！！！」

姉さん、夕衣、父さん、母さん……。

俺、このスカイアウン学園でやっていけるかどうか心配です………。

第6話 俺様傲慢我儘自己中理事長様（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

絢のキャラ位置づけが決まりました。

ネタバレしないように書く現実逃避が上手くて若干ヘタレ。だが殺人剣、如月一族の直系で攻撃力は4人の中で一番強い。ですかね？

第7話 初授業……（前書き）

やっと7話……。

第7話 初授業……

「おはようこんちはこんばんは、俺が科学魔術学部1年の担当、日あいうえお合あいうえお炉鬼だ。よろしく」

俺達が科学魔術学部に来て指定された席…全員が一列で隣だった…に着いて数分後、白衣を着た「少年」が来た。それで最初の一言がアレだったわけだ。

「ちなみに俺がこんな身体なのは科学と魔術でいろいろやったら肉体年齢が停止したからだ。精神年齢は1000を超えてるから……てめえら、俺のことなめたら解体して改造して改良するかな?」
1000超えてるって……ありえないだろ!!

ほら、皆引いちゃってるし……って凜音は何で「じゃあーくんだね!」って笑ってんの!? 鴉は何故「よろしくお願いしまーす」ってにこやかに言っちゃってんのお!?

「?」おお、よく見たら神代裕真じゃねえか、てめえの父親も科学魔術学部で俺がよく改造してやったが元気か? 一度診察してやるって伝言伝えとけ」

「……はい分かりました……」
父さん…先に言えよ……。

いや、恐怖のあまり思い出したくもなかったってところだな。
つか科学魔術学部なのかよ。

「父親で満足したからな。お前は改良してやる」

「改造も改良も同じじゃねえか!」

「何言ってるんだ。改良なら改めて良くなれるってことだぞ。よし、放課後俺の研究室に來い」

「いやですっ!」

何言ってるんだああ!!

「…チツ。よし、授業を始める」

舌打ちしたよな!? おい!!

「うつせえ」

「心読むな!!」

授業はまあ、基礎だった。曰く、「復習」らしい。

「魔術はつまり元素からできてるわけだな。その中で最強の元素魔術は何もなく、全てが平等だ。さが強弱関係はあり、火、水、雷、空気、風、土、風、もちろんわかんと思うから説明は省く」

省くのかよ。

ちなみにアースの中で有名な元素とは「火、水、雷、空気、土」だ。

「こんな感じに雷と空気を混ぜれば……………こんな感じだ」

炉鬼先生の腕に雷が走っている竜巻が生まれ肩から手首までを往復している。

おお　　っ

周りから生徒の感嘆の声が漏れた。勿論俺もそんな1人。

あ、言い忘れてたが1年は合計10人だ。男5人、女5人の10人。「魔力：魔術を最大限発揮させるには己の知恵だ。知恵があれば魔術は応える。それに元素魔力の雷を発達させればナ　トの　スケの十八番、千　だって出来るかも知れないし、火を発達させればマオのクツ　のおなじみ火炎放射だって出来るかもしれない…いや、リ　ードンの方がいいか…」

「例えば二次元出すってどんだけだよ！つか最後はジャンルがちげーよ！！きちんとポケ　ンを言えよ！！」

「うるさい、何出そうと教師である俺の勝手だ」

この学園、俺様多くね？

ちなみに元素魔力って言うのは自分がどれだけ元素を操れるかを言葉にした奴で、発達させるって言うのは修行して強くなる…みたいなもんだ。

「簡単に言つと、魔術には想像力も必要だ。剛毅な考えと柔軟な想像。いや、強固な理性と曖昧な感情、か…………」

意味分かんねえよ。

そして炉鬼先生は黒板を思いっきり叩いた。
ドン！

とても大きな音が鳴った。

「俺の授業はこれで終わりだ」

そして扉を開けて先生は立ち去った。

初授業終了。

ってこれでいいのか！？

第7話 初授業……（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

第8話 性格違えど中身は同じ

俺と凜音と絢と鴉は廊下を歩いていた。

科学魔術学部での2回目の授業は移動教室らしい。

「なあ鴉。移動教室ってどこに移動すんだ？」

「えーつとね……」

「あ、私知ってるよ！」

凜音がはいはい！とばかりに右腕を上げる。

「機械魔術工学研究候補生徒授業用教室に私たちは移動するんだよ

！！」

「長いよ。漢字表記で17文字もあるよ」

俺ではなく絢が突っ込んだ。

「しかも研究候補ってなんだよ！！」

これは俺。

「研究候補って言うのは研究にする程までにその真意や重要性がつかめてない物や、正直言うと「これ研究するのめんどくさそうだな

ー」とか言う物のことだよ！」

「前はいいとして後ろはどう見たって研究者がサボってるだけだろ

！！」

「ノーベル科学賞を受賞した天才科学者！ただし研究内容は小学生の平均睡眠時間！みたいなっ！」

「パクるなあああああ！！」

それは戯 シリーズの葵井巫 子だああああ！！

「お前らパクリ多すぎなんだよ！！」

「それほどでも」

「ほーめーてーねー！！」

「あつ、機械魔術工学研究候補生徒授業用教室…ついたよ」

目の前には『機械魔術工学研究候補生徒授業用教室』の看板が掛けられたでかい扉。

「行っこー！」

上手く話をそらされた気分だがしょうがない。

絢が俺の肩をポンツと叩いた。

「おつかれ…」

「…お前もな」

中に入るとそこには……白衣を着ていて何故か、上にかなり年季が入ってる小学生が描くような魔女が頭にのせてるヤツ　三角帽を被り、長い髪を三つあみにして黒いフレームの丸眼鏡をかけている可愛いの部類に十分入りそうな20代前半の女……俺と凜音の担任がいた。

「おはようこんにちはこんばんは。私の名前は日合空鬼^{あき}です。よろしく願います」

そして深々と頭を上げる空鬼先生。

ん？ 炉鬼先生と同じ名字。

「ちなみにあなた達がさつき授業を受けた日合炉鬼とは姉弟の関係です……」

やっぱりか！！

あれ？ 炉鬼先生って1000歳超えてるんじゃない……。

「年齢は……ヒミツです。あえて言うなら……1500歳は超えてます……」

言ってんじゃないかよ。

言ってんじゃないかよ！

つか1500歳かよ！！

「で、では授業を始めます……」

でもまあ、内気そうだけど普通そうだし…。

「授業内容は人体解体改造改良の基礎知識です……。科学と魔術を合わせた高度な物なので、私が実演しますね……」

普通じゃなかった！！

機械魔術工学研究候補生徒授業用教室の名前の意味がねえ！

それなら機械魔術解剖学候補生徒授業用教室の方がいいと思う！

「ちなみに、実験体は3年の二宮さんです…」

しかも生徒を実験台にした！？

炉鬼先生も父さんを解体してたらしいし……。

この姉弟…似すぎだろおおおお！！

第8話 性格違えど中身は同じ（後書き）

日合姉弟は謎だらけです。ハイ。

最近皆のキャラが掴めません……放置してましたから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9495e/>

科学魔術学部によろこそ！

2010年10月14日14時16分発行